
モンスターハンター【負に抗う狩人】

散華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター【負に抗う狩人】

【NZコード】

N4375Z

【作者名】

散華

【あらすじ】

正体不明の龍の襲撃によって多くの大切な人を失った人・ヨハン・シュトライル。彼はこの世のモンスターに復讐するためにハンターとなる。

しかし、ある少女との出会いをきっかけに別の志も同時に抱くようになる。一つの志を抱きながら周囲の人々と過ごす中で成長していく少年と少女の物語

プロローグ（前書き）

初めまして、散華と申します。発投稿なので温かい目で見ていただけたら幸いです。作者は厨二病な上、国語力に自信がありません（殴。誤字脱字のオンパレードになるかもしれません（汗。こんなダメ作者ですがよろしくお願ひします。では、本編をどうぞ）

プロローグ

（？？？ side ）

僕の目の前に広がっているのは荒々しく燃え続けている炎と、散らばった積み荷、無惨に殺された人々の亡骸だけ…。

「父さん…母さん…」

その中には産まれてからこの15年間、共に生きてきた両親の亡骸があつた。父親は、G級と呼ばれる凄腕のハンターで昔から様々な飛竜を討伐した時の話をしてくれた。幼いころからハンターになることを夢見ていた僕を鍛えてくれたのも父さんだつた。そんな父さんは今、僕の目の前で銀火竜の防具を碎かれ頭から血を流して倒れている…。母親はやり手の行商人でハンターズギルドからも一日置かれていた。

この仕事が終わつたらドンドルマでハンター用の専門店を作り、その店の店主になるんだと僕は母さんから聞いていた。こんな母さんも炎に巻き込まれて還らぬ人になつてしまつた…。

このキャラバンに最早生き残つている人などいない…僕一人を除いて。何故僕は生き残つてしまつたのか？その疑問に答えてくれるものは無い。聞こえてくるのはパチッパチッと残骸が燃える音だけ…。

『知りたいのか？』

突然聞こえてきた声に、僕は動揺を隠せずにいた。

威圧感があり聞いた者を恐怖させるような声だつた。しかし、その時の僕はそんな事を気にする余裕は無かつた。生きている人がまだいるんだ！と、いう淡い希望を抱いた。

「誰か…まだ生きているの…？」

僕は今にも消えそうな弱い声を出して、辺りを見回した。しかし、生きている人なんて僕の視界には一人たりとも入らなかつた。代わりに見つけたのは、今まで見たことも聞いたことも無いような姿をした、一頭の龍だつた。

『貴様が何故生きているのか、教えてやろうか？』

間違いない。この龍が言葉を発している。常識的に考えて龍が喋る訳がない。何故、この龍が喋っているのか疑問には思つた。だが、そんなことよりも皆の敵が目の前に居るのだ。今なら敵討ちだって出来るはずだ！

そう考えた僕は、咄嗟に近くに落ちていた父さんの愛刀『飛竜刀【銀】』を取り、目の前の憎き龍に全力で振り下ろした。

「つりあああつつー！」

今の思いを全て乗せ振り下ろした太刀は、的確に龍の胴体を捉えていた。これなら確実に痛手を負わすことが出来る！しかし、現実はそう甘くは無かつた。

『まだまだ足りんな…』

驚くことに、その龍は避けのこともせずそのまま胴体で僕の太刀を受けとめた。太刀は切ることも弾かれることもなく、龍の胴体の表面で止まっている。僕がそれからどんなに力を入れてもってピクリとも太刀は動かない。

『やはつ』の程度か…』

龍は、そう呟くと脚で太刀ごと僕を吹き飛ばした。まるで足元にある小石を蹴るかのように。そんな攻撃で僕は数メートル先まで飛ばされていった。

「ガハッ…」

僕は受け身を取ることも出来ずに後方にあつた岩に背中を強く打つた。肺から根こそぎ空気を奪われ、正常に呼吸が出来なくなつたらしい。ただ幸いなことに骨が折れたり、内臓にダメージを受けたりはしていないようだつた。

『ふん…そのままおとなしく聞いていればよい』

「何の話だつ…！」

『我が貴様を生かしてやつた理由だよ』

生かしてやつた…つてことは、僕が生きているのは偶然でも何でもないのか…。

『その通りだ。良く分かっているようだな』

この龍は人の心まで読むのか…。こんな奴相手じゃ、今ままじゃ…

『我が望みはただ一つ。我的完全復活のみよー』

「完全…復活だと…？」

『やつだ。やうなる高みを目指すためは必要不可ことだ。完全復活をするこはまだまだ足りないものがある』

『やうなる高みだつて？この龍は何を言つてゐんだ？』

『それを話すつもりは毛頭無い。貴様には関係の無いことだからな』

『周りくどい話は止める。なんで僕を生かした！』

『少しゲームをしようと思つてな』

『ゲームだと？』

『ああ。我の完全復活に足りないものは、悲しみや憎しみなどの負の感情だ。これを集めるのに入間を使わない手はない。大量に早く集まるからなあ』

『何て奴だ！』

『何とでも言つがいこ。負の感情を素早く集めるためには、いつもやつて隊商や村、町を襲撃するのが一番だ。襲撃するための配下を今集めてこないとこだ。そこでやつとしたゲームを考えたのだよ』

『何？』

『少し人間達にもチャンスをさせてやうつとこつものだ。我の配下を一斉に送るのではなく一頭ずつ順番に送つてやる。それを凌げば負の感情の増加を防げるだつ。そしてそれは我の復活を妨げることもなる。どうだ？面白そうなゲームだろ？』

つまり、襲つてくるモンスターを退けていけば良いって訳か。ギルドに相談して対策すれば阻止できるさすだ。

『ああ、ギルドは信用しないほうが良いと思つた。』

「何つ？」

『ここはついこの間、ギルドナイトによつて調査された場所。その時、この地域全体が侵入禁止区域に設定されたはずだ…。それなのに何故民間人の貴様等が入れたんだと思う?』

「それは…父さんを信頼して…」

「これ以外理由があるわけないのに…。僕の頭に最悪の理由がチラつく…。」

『違つた。貴様等は皆実験台にされたのだ。我の危険性を測るために…。』

「嘘だつ…」

『嘘だと思つのならこの炎が鎮まるまで待つてみるがいい。ギルドナイト共が来るはずだからな』

「…………」

その一言に僕は何も言えなくなつた。嘘のはずなのに、どうしてだろつ。本当のことだと思えてしまう。ギルドナイトがそんな事するわけないのに…。

『これが現実とこつものだ。ギルドが必ずしも正義とこつことはな

い。決してな

僕は何を信じればいいのだろうか？信じていたギルドが信用出来ず、頼れる知り合いは皆死んでしまった…。もう信じられるものなんて…

『自分だけ信じればいい。ゲームは互角でなければ面白くない。貴様に力をくれてやる。』

そう言つと龍は僕に近づいて、先ほど怪我した背中に龍が生み出した玉を押しあてた。

「ぐわああああつ…」

目の前が明滅する…。気が遠くなるような痛みを伴いながら龍の玉は僕の体に吸収され跡形もなくなつた。感じるのは自分の奥底に芽生えた禍々しい力。

『それは我と同じ力。貴様がモンスターを恨めば恨むほど力を『えてくれよう。その力をもつて我を脅かす程の力を得て見せよ。ヨハン・シコトラールよ』

その言葉を聞いた後、不思議な感覚にみまわれた。まるで僕が『僕』で無くなるような…。でも今はコイツを倒すための力が欲しい！そのためならどんな犠牲だって…。

現実に戻ると『僕』でない自分がいた…。

「お前の望み通りになるのは癪だがやつてやろうじやねーか。俺がすぐに教えてやるよ…。力を与えたのは間違いだつたってなあ！」

『楽しみにさせてもらひやつ。さひばだ。』

そう言つてアイツは飛び去つていつた。その後、アイツの言つた通り、ギルドナイトが現れた。まあ、追い返してやつたよ。今更救うこともできないし、そもそもあんな奴ら信用ならぬからな。俺は皆の墓標を作つてこう誓つた。

「必ず敵を討つーそして、アイツに…いや、全てのモンスターに逆襲する…」

これが後に『竜殺し』の一いつ名を得たコハン・シコト・ラールの生まれた瞬間だった。

プロローグ（後書き）

こんな感じでグダグダ進みます。

基本的にMHP3rdを土台にして書いていきます。
今後も勝手な設定がちらほらでぬかと思します。

こんな作品ですがよろしくお願いします～

では、また～

狩人の街 ドンドルマ（前書き）

一話目です。前置きが随分長くなっています。
今回はヒロインがメインで登場します！主人公のヨハン君は早速、
空気になりかけてしまいました。：

後一話くらい、戦闘シーンがでないと思います（泣）モンハンなのに…。

それでは、本編をどうぞ…

狩人の街 ドンドルマ

（ドンドルマ）

それはハンター達にとつての聖地。街の市場に行けば、ところ狭しと並んだ出店から活氣のある声が聞こえる。ある店は栄養剤や鬼人薬など普通では取り扱っていないものを置いてあつたり、別の店では大タル爆弾Gや打ち上げタル爆弾、マタタビ爆弾までやたらと爆弾ばかり揃えていたりする。また違う店を見れば野菜や肉、魚がこれでもかというほど並んでいる。これが『ドンドルマに揃わぬもの無し』と、言われる由縁である。

少し場所を移すと大きな鍛冶屋があり、様々な武器がありとあらゆる材料を使って造られている。新機能の開発もここで行つていて、最近ではガンランスのフルバースト機能を開発したらしい。そんな鍛冶屋は今日も武器の整備に来た者、防具を新調しにきた者、武器のカタログを見に来た者など多くのハンターで溢れている。

そして街の中心部に行くと何人入るのか考えるのも馬鹿に思えてくるような巨大な酒場がある。この酒場は一つに分かれている。一つはどんな人でも入れる『レストラン』。そしてもう一つがハンター専用の『集会所』と呼ばれる場所である。多くのハンターの目的地はこの『集会所』だろう。此処では、ハンター登録、クエスト受注、パーティー集め、そしてクエスト成功を祝した酒宴など全てがおこなえる。特にハンター人口の多いドンドルマでは、パーティー集めはほとんど困ることはない。このドンドルマには初心者からベテランの上位ハンターまで様々なランクの人がいる。初対面でも同じモンスターを倒そうとしている人とパーティーを組んだりする。また、初心者同士お互いに腕を競い合うためにパーティーを組む者もいる。そう、こんなにも多種多様なハンターがいるのだ。人が集まらない

クエストなんて存在しない…………緊急クエストを除けば。

緊急クエストとはモンスターの存在が村やキャラバンが危機的状況になる可能性があり、自分たちではどうにもならない時ギルドに岡される救援要請のことだ。緊急クエストの問題点は大きく二つ。一つは、情報が不確かだということ。下調べが満足にできないため予測していないモンスターの乱入にあつたり、報告されたモンスターの数より圧倒的に多いことさえ起る。このため初心者は緊急クエストを敬遠せざるを得ない。二つ目は、報酬の低さ。依頼主からすれば今出せる 金額全てかもしれないが、それでも難易度に見合った金額とは到底言えない。むしろ通常の簡単なクエストのほうが高い場合もある。これではハンターは得するわけない。そして二つ目は距離の遠さだ。緊急クエストのほとんどがドンドルマから五日以上掛かるような遠い所からのクエストだ。緊急クエストを受けている間にドンドルマに居れば二～三個のクエストができる。つまり、自分のハンターランクを上げるには難易度が高く、時間の掛かる非効率的なクエストなのだ。よって受注する者は人助けをしたいと思つているような心優しい者しか居ないと言つても過言ではない。そんな絶滅危惧種のハンターを捕まえなければならぬので、依頼する側も最悪受けて貰えない可能性を考えなければならぬ。事実依頼を流されてしまった村の中には、村人全員が村をでて別の場所に新たに村を興すものもあつた。（勿論以前の場所よりドンドルマ寄りに）

緊急クエストが嫌われているのはいつものことだ。今日もその事実が変わることはない。今日もいくつか緊急クエストが貼られるものの酒場にいる何百人ものハンターのうち片手で数えられる程度の者しか受注していない。その大半がパーティーも集まらずにソロで現地へ向かっていく。今日もいつもと変わらず緊急クエストの依頼をしにきた者がいた。

「うう……、人生初のドンドルマがまさかこんな理由でなんて……。

どこか落ち込んでいる表情を浮かべる少女。しかし、ただの少女ではなかった。体はハンター装備と呼ばれる初心者が良く扱う防具をつけていた。ハンターの中にはあえて頭防具を着けないものがいる。視界をフルに活用したい考える者や、極稀に人に自分の容姿を見せるためにワザと着ない者などがいる。彼女は前者のようだ。その代わりに耳にはピアスをついている。そして、背中にはこれまで初心者御用達の『『ハンター ボウ?』』が装備されている。髪は薄い水色のロングヘアで紫色の目をしている。ハンターでは珍しく肌の色が白い。見た目はなかなか美人だが、動作があわただしい。オロオロしながら受付へと近づいていく。彼女はドンドルマに来たことが無かつたようで、とんでもない量の人驚きつ放しのようだった。

村でのお祭りがかわいく見えるよう…。毎日こんなに人がいたらおかしくなっちゃいそう…。

そんな、初めてドンドルマに来た人が誰しも抱く感情をもつたまま、彼女は受付にたどり着いた。

「いらっしゃい。ここがドンドルマのギルド受付です。」

営業スマイル満天で出迎えてくれた。

「よ、ようじくおねがいしますー！」

「ハイ、元気がよくて良いわね。アタシは受付嬢のシャーリー

よ。今日はドンドルマでのハンター登録つてどこかしり?」

「はい…。それとは別にもう一件あります…。」

おもむろにポケットから紙と小袋に入ったお金を取り出した。

「なるほどね~。そりこいつ」とね。」

「わたしの力じや、まだ無理なんで…。」

「わかつたわ。じゃあ、サッサとハンター登録やっちゃいましょー！」

「…」
テンション高い人だなあ~と思いつつ手渡された紙に必要事項を書き込んでいく。良く珍しいと言われるが、わたしは左利きだ。ハンターになるときに普通は右で扱うように教わるらしいけど、わたしは師匠に「そんなん、使いやすい方に決まっているでしょ…」と、言われ左で「を扱っている。ランさんに頼んで防具は特注で左利き用に作って貰つてるんだけど…。

「あら、左利きなの?久しぶりに稀少種をみたわ~。」

やつぱりそなんですか…。シャーリーさんが、まるで珍しい動物を見るかのような目でわたしを見てくる。うう…ドンドルマには居ると思つてたのに~。師匠…あなたはどんだけ浮いた存在だつたんですか…。「大丈夫、大丈夫!~ど~せ結構いるつて」つて言つから信じじてきたのに~。

何となくやりきれない思いのままどんどん必要事項を記入していく。あの~、シャーリーさん?視線が気になつて書きづらいんですけど…。非常にやりにくい中なんとか書き終えられた。

「は～い、OKで～す～ええ～と、ミナシキ村のイーシャ・アスペリアね。イーシャちゃんよ～いこ～、ドンドルマ～。これでドンドルマのギルドが使用できるわよ～。」

「ありがとうございます。」

「しかし、ミナシキ村ねえ…。随分ここから離れているからあんまりここでクロスト受けられなさそうね…。せっかくの稀少種なのに…。」

そろそろ利き手のことは流して欲しいんだけどなあ。わたしは軽く笑って受け流そうとした。

「まあ、村が大丈夫そなうなり来ますよ、あつと。」

「や～してくれば嬉しいわあ。」

「せ、善処します…。」

「う…、その観察するよつたで見ないで欲しいの…。だんだんシャーリーさんに苦手意識を持ちそうになる。」

「これ以上、見続けると嫌われそうだね。今回はこそくらこにしてあげるわ。」

あれ？ ちょっとこの人、心中読めちゃうんですか…？ ヘタなこと考えられないのかな…。

「そんな、イヤそうな顔されちゃあねえ。まあ、ここでやり続ける方がアタシは好きだけどね～」

「全力で止めていただきたいです！」

「あらあら～冗談よ、冗談。」

「だーこの人絶対ドジだ。まあ、心を読まれていたわけでは無いよつのでとりあえず一安心…？安心しちゃつていいのか、わたし？」

「わーと、イーシャちゃんの本題はこいつじやないのよね？」

「はー…。」

そう言つて出しておいた紙を手渡す。

「クロイツ渓流に現れたクルペッコ討伐ね…。」

「報酬金はこれだけありますガ…。」

そう言つて、持ってきた袋を手渡す。村のみんなに出して貰つたお金は、普通のクルペッコ討伐クエストの倍近くある。報酬としては十二分だ。しかし、シャーリーは浮かない顔をで

「なかなか難しいわね…。」

と、答えた。驚きを隠せずにいたわたしに對して続けて理由を説明してくれた。

「問題点は一つ。まず一つ目が場所ね。ドンドルマからナツキ村まで5日はかかるわ。クエストの日数込みで、だいたい2週間。これはちよつと遠いわ。」

「確かに、遠いですけどその分報酬が…。」

「大きな問題は二つ田よ…。狩猟対象がクルペッコなこと。周辺の詳しい情報がないから、戦闘中にクルペッコより危険なモンスターを呼びこむ可能性があるわ。この辺りだとリオレウスとかが来るかもしれない。そうなると難易度が上がって手が出しづらくなるわ。それにクルペッコ自体珍しくないから狙つて倒しに行くならもつと近場があるもの…。」

「そ、そんな…。」

「諦めないで。アタシからも呼びかけてあげるから。イーシャちゃんもハンター達に呼びかけてみて。」

「はい、頑張ります！」

意気込んでやり続けること三時間。結果は……見事全敗。声を掛けたハンター達は、「ペッコなんて素材いらないし。」とか「どこの田舎だよ？遠すぎだつてーの。」と、口々に言つた。ちょうどクルペッコを倒した位のランクのハンターは、「えつ…。周辺状況不明…。ごめん、せつかくだけど…。」と、言つて断つた。やっぱり何が起こるかわからない所には行きたくないんだ。わたしだつて同じ状況だつたら行きたくないと思うだろ。でも…今はこのクエストを受けてくれる人を絶対に見つけなければならない、村の皆のため。それがわたしに今できる事だ！

そう意気込んでいる所に声を掛けて来るハンターがいた。

「なあ、嬢ちゃん。オレ達と一緒にクエストつけないかい？」

下品な笑みを浮かべた下心満載なハンターが一人。全力で断りたいけれども今はそんな場合じゃない。一応装備はルドロスとフロギイだからクルペッコは大丈夫なはず。この人達にも頼んでみよう…すつじぐ、いやだけどね。

「あの〜、このクエスト受けて欲しいんですけど…。」

「ああ、どれどれ…。」

おもむろに読み始めたハンター達。しつかり読んでいるかと思えば、彼らは急に笑いはじめた。

「クルペッコで緊急クエストだなんてどんなへボい村だよ、此処は。」

「全くですぜ、兄貴。そもそも着いた頃には、滅んでんじゃないですかね?」こんな村。

「そのとおりだぜ。おい、嬢ちゃん。こんなくだらねえ人助けしないでオレ達と一緒に…。」

「……………てください。」

「ああ、何だつて?」

「謝つてくださいって言つていろんですよ!」

わたしの怒号が集会所に響き渡る。村を侮辱する発言をしているハンター達に、わたしは怒りを抑えることができなかつた。わたしの

大切な村をよくも…。

「あなた達は村のことを何も知らないでそんなこと言わないでよ…」

「んなもん、知るかよ…お前みたいな弱いハンターは黙つてついて
くりやいいんだよ！」

「お断りします！だれがあなた達なんかに…」

「調子に乗るなよガキが…。」

まさに一触即発の事態。酒場もしだいに静まり返つていった。そん
な時、一人のハンターが止めに入ってきた。

「止める！」

止めに入ったハンターは、銀髪に緑眼でわたしより少し年上に見え
た。

「なんだテメーは、オレを誰だ…と…。」

ルドロス装備のハンターの声は徐々に小さくなつて、終いには消え
てしまつた。目の前にいる男は、頭防具はないが、非常に凶暴で危
険とされている飛竜、ティガレックスの素材で作られたレックスシ
リーズの防具をつけている。遙かに格上の存在だった。フロギイ装
備のハンターはビビりながら話す。

「あ、兄貴…。コイツ『竜殺し』ですよ…。」

「な、なんだと…。」

動搖を隠せないハンター達に『竜殺し』と呼ばれたハンターが話す。

「これ以上騒ぐんだつたら、ソレからは僕が相手をするけど……どうする?」

「兄貴、これはマズいですよ。」

「お、覚えてやがれ!」

あのハンター達は、ダッシュで集会所から出て行く。まるで強走薬を飲んだかのような凄い勢いで逃げていった。

「どんだけ、典型的な悪役なんだよ。」

その言葉にわたしは思わず笑ってしまった。確かにそうだけじねえ。

「うう、それより君は……大丈夫そうだね。」

「ふふ、はい。おかげさまで。助けてくれてありがと!」
「うう、それより君は……大丈夫そうだね。」

わたしはペロリと一礼した。

「やつかい。そりや良かつた。」

彼は微笑んでこたえた

「わたしはイーシャ・アスペリアと言います。あなたは?」

「僕はヨハン。ヨハン・シユトラールだよ。まあ、立ち話もなんだし席に着こつか。その話が聞きたいしね。」

そういうつて指差す先には、わたしの持つててきたクエスト用紙があつた。

ヨハン sides

いつものようにクエストから帰ってきて、シャーリーから新しい緊急クエストの話を聞いていたら、女の子の怒号が聞こえてきた。驚いて声の主に目をやると、一触即発の事態になっていた。

「なあ、シャーリー。彼女が、もしかして依頼主？」

「そうそう、彼女が……って一体何事!?」

「喧嘩だうつなあ。」

「ちよ、ちよつとマズいわよ。あの状況。

「そーだなあ。」

「ねえ、ヨハン? なんで助けにいかないのよ?」

「えつ、僕ですか？」

「あんたしかいないでしょー。ほり、後で飯一回奢つてあげるから、とつと行きなさいー！」

「一回分ならもつと速くいけるんだけど?」

「なにか言つたかしら!」

「スマセン、全速力で行かせてもらいます。スマセン。」

なんて威圧感だよ…。あれならティガのがましだよ…。
まあ、ちゃつちゃと鎮めますか~。

「止めろ!」

相手がなんか言つてるけど、どーせすぐにビビるはず。やつ思つて
いるとすぐに僕の装備見て逃げ腰になる。あともうひと押しになつ
と。

「これ以上騒ぐんだつたら、いつからは僕が相手をするけど…どう
する?」

「兄貴、これはマズいですよ…。」

「お、覚えてやがれ!」

うーん…、とんでもなく骨のないやつらだつたなあ。なんて典型的
な悪役なんだよ…。

「つと、それより君は…大丈夫そうだね。」

ん…? なんでこの子笑つてるんだ? また、思つてたことが口に出す
やつたか?

「ふふっ、はい。おかげさまで。助けてくれてありがとうございます。」

しっかりお辞儀をしてくれた。最近マナーが悪いって言われてるけど、いうこう子もいるんだなあ。

「わうかい。そりゃ良かった。」

「わたしはイーシャ・アスペリアとします。あなたは?」

イーシャの問いかけに対しても用紙に指差しながら答えた

「僕はヨハン。ヨハン・シュトラールだよ。まあ、立ち話もなんだし席に着こつか。その話が聞きたいしね。」

ドンドルマで初めて出あつた二人。彼らは、この先何が起きるか、まだ知らない。

狩人の街 ドンドルマ（後書き）

はい、彼女が今作のヒロイン、イーシャです。詳しい設定は今度のせますが、とりあえず。

ヨハン・シュトラー 18歳

武器：太刀

防具：レックスシリーズ+剣聖のピアス

イーシャ・アスペリア 16歳

武器：弓

防具：ハンターシリーズ

と、こんな感じです。

次回はイーシャとヨハンの会話がメインになると思います。

では、また

イーシャの経歴～ドンドルマに現れた天才～（前書き）

いつも、散華です。今回更新が遅れてしまつて本当に申し訳ありません。今回は生まれて初めて、インフルエンザにかかってしまい、その間の課題に追われ、執筆がままならない状態になってしましました。今後このようなことがないように、予防接種についてのことを書きます。本当に申し訳ありませんでしたm（—_—）m

さて、本編の話になりますが…、今回で一応ドンドルマから離れ、次回からミナツキ村へと場面が移る予定です。今回はドンドルマを自分勝手に作り替えてます。これが私の小説に置けるドンドルマだと理解いただけたらと思います。

さて、前置きが長くなりましたが次から本編です。では、どうぞ。

イーシャの経歴～ドンドルマに現れた天才～

～ヨハン side～

僕達は一緒にテーブルに座り、早めの夕食をとることにした。今日はシャーリーの約束で自分はタダ飯なんで、イーシャの分を齎つてあげることにした。彼女も最初は断つたが、空腹には逆らえなかつたようだ。そもそもドンドルマに来るのは帰りの旅費を除いた所持金ほとんどつて……。聞けば、すぐにクエストを受けてくれるハンターが見つかると思っていたので今日中にドンドルマから出発する予定だつたらしい。一刻も早く村の人を安心させるためだつたらしいが……。

「まあ、随分無謀ねえ～。」

料理を運んできたシャーリーも話を聞いていたらしい。言おうとしていたことを先取りされた。

「そうですか？疲れてないんで、これ位平氣ですよ？」

「まあ、こつちも体力的にはね。けど、依頼したハンターが装備を整えたりする時間は考えてなかつたの？」

「あつ……。」

うん、全く考えてなかつたね、この子。集会所にいるハンターの中に、今すぐクエストに行ける状態のハンターなんていない。集会所で出来ることはクエストの受注と報告くらいだ。装備をつけている

のは、ハンターであることや自分の大まかなランクを示すために、決してクエストに行く準備が整っているという意味合いではない。受注するクエストが決まってから装備を整備したり、アイテムを揃えるのが一般的だ。どうやら、ハンターがほとんどないミナツキ村では考え方が違うようで、どんな時でも戦えるように普段から自分自身で整備するそうだ。ドンドルマでハンターをしていると、どうも店に頼んでしまってあまり自分で整備しなくなってしまう。これは見習うべきだなと、思つていて……

「まあ、そういうのランさんが恐ろしいんで……。」

聞いてはいけない本音を聞いた気がする……。

「た、大変そうだね……。」

「ヨハンさんもきつちり装備を整備してからいくべきですよ。あの人は初対面とか関係無いですから……。」

「……きつちり整えるよ。」

大切な事前情報を貰えて良かつた。知らないで行つたらクエスト前に一死だよ……。

「そういえば、イーシャちゃん。このクエスト一緒に行かないの?」

「今は、遠慮しようかと思つてます。ヨハンさんの足引つ張つたら申し訳ないです。」

「因みに今まで狩つたことのあるモンスターは?」

「ドスシャギイが最高です。」

「ハンターになつてどのくらい？」

「1ヶ月ですよ。」

「……？」

その言葉に驚愕した。ドンドルマにあるハンター養成施設を出た人でも、実戦との差やソロ狩りに困惑してドスシャギイを狩ることには一、三ヶ月経ってしまっている。それなのに彼女は1ヶ月でやつてのけた。ハンター養成学校にも行つていないので……。だが、彼女はまだ自分に自信が持てないのだろう。ハンターになつて1ヶ月なんだから当たり前だけど……。しかし、1ヶ月以内でドスシャギイを倒したことは彼女にはハンター養成学校の生徒よりもしっかりとした技術が身についていることを示している。クルペッコは飛竜と言えども強さはドスシャギイと大きく変わらない。彼女の実力が本物ならば問題ない。それにクエストに成功すれば自分の実力に自信が持てるだろう。新人育成に一肌脱ぐか：

「イーシャはクルペッコと戦うのに十分実力がついていると思うよ。それに今回は一人じゃない、僕もいる。だから一緒行かないかい？」

「でも……。」

「イーシャは自分の村の危機を自分で守りたいと思わないかい？」

「それは……そうですが……。」

「僕はあくまでイーシャの手伝いをするだけ。君がその手で村を守

るんだー。」

「でも、もしも…。」

「もしものことなごと、起じれせない。僕がイーシャをやつてみせ
る。」

「えつ…。」

「ん?何か変な」と言つたかな?イーシャの顔が真つ赤なんだけど…。

「ヨハン…今のまゝよつと…。」

「そう言つておたのはシャーリーだつた。」

「えつ?何か変な」と言つてた?」

「氣づいてないのね。もういいわ。」

「そ、そつ…?」

シャーリーが呆れてこの場を去つていいく。何だ?僕は何をしてしま
つたんだ?

「そうだ。イーシャ結局どうする?」

「ふえつーは、はい。」

なんだかボクとしていたみたいだな。

「一緒にいくかい？」

「不安は残つてますけど、行つてみたいですね！」

「どうやら背中を押せたみたいだな……。良かつた良かつた。

「……あんなこと言われたら断れないじゃありませんか……。」

「えつ？ 何か言つた？」

「いっ、いえ。なんでもござれません！」

何か語尾が凄いことになつてゐるよ、イーシャ。また顔が真つ赤だし
大丈夫かな……？

「よつやく終わつたのね。見てるいっしが恥ずかしくなるわよ、ア
ナタ達。」

そつとシャーリーは注文した料理を持つて戻つてきた。

「い、これは……その……」

顔を真つ赤にして、首を横にふるイーシャ。それを見てニヤニヤして
いるシャーリー。何だろ？ 何かあつたのかな？

「二人とも、どうしたの。何かあつたの？」

「…………」「

心なしかみんな視線が冷たい……。なんで？

「まあいいわ。それよりほら、冷めないうちに食べなさい。」

テーブルの上に並べられた料理はどれも華やかで美味しいそうだ。この集会所では通常メニューの他に、キッチンアイルーが作った『猫飯』を注文できる。この『猫飯』はアイルー秘伝の調理法で作る料理で、食べ合わせによっては自分の身体能力を底上げすることができる。そのかわり値段は通常メニューより高めで、ハンターランクが上がるほど食材も豪華になり値段もどんどん高くなる。その点、通常メニューは値段が最高でも上位ハンターの『猫飯』より安く、味もひけをとらない。ハンター達は、基本的にクエストに行く前だけ『猫飯』を食べて、今日のようにクエストを受注するだけの時や、クエスト成功を祝う時は通常メニューの方を注文するものだ。ふと視線を料理から上げて、目の前に向けると……そこには今日一番の笑顔のイーシャがいた。目の前にある料理に向けられたその目は、まるで新しいオモチャを見つめる子供のように、眩しいまでにキラキラしていた。そんなイーシャをこれ以上待たせる訳にはいかないので

「それじゃ挨拶しようか。」

「はいー是非とも今すぐーーー！」

「う、うん。」

「「いただきますーーー！」

イーシャのイメージが最初とだいぶ変わった気がする……。横にいるシャーリーも彼女の変化に少し戸惑ったようだが、自分達の作る料理を嬉しそうに眺めているイーシャを見て、気分が良いのか上機嫌

な表情を浮かべている。僕も箸を持つて自分の料理を食べてみた。今日はシャーリーの奢りと言つことで遠慮なくいつもより奮発したためか、非常に美味しい。

「やっぱり、流石だね。凄く美味しいよー。」

「わづよね。人に奢らせた料理は、なかなか美味しいでしょ？」

そんなつもりなく本音なんだけどなあ…。シャーリーはなおも冷たい視線を送り続けている。なんか今日こんなことばっかりだな…。あれ…？ イーシャはまだ食べ出してないな。彼女は何か懐かしそうな目でこいつを見ている。ビリしたんだろうか？

「ビリした、イーシャ。体調悪いのか？」

「いえいえ、そんなことないです！ ただ…」 こいつやって誰かと落ち着いて食事するの久しぶりだなって思つて…。」

「いつも一人なのかい？」

「いえ。師匠といった時は一緒に食べてましたし、最近はクエスト成功するたびにシズクさん達が祝ってくれてたんで、一人なんてめったにないですよ。」

「なら、そんなに懐かしがるよつなこと無いんじゃないの？」

「それが……恥ずかしいんですけど、わたしの村の人はみんな競い合つのが好きみたいで、食事の時も『誰が一番多く早く食べられるか』とかやつているんですよ。そんなこと気にしなければいいと思つてはいるんですけど、やっぱりわたしも村の人なんでしょうね…。」

「つまり、それに参加しちゃうんだね…。」

「恥ずかしながら…。だから、誰かといこうじてゆつたり落ち着いて食べるには久しぶりなんです。」

「なるほど…。」

「聞けば聞くほどとんでも無い村だな…ミナツキ村。これはしつかり気合いを入れて行かないとなあ…。」

「大丈夫ですよ、ヨハンさん。皆優しいですし、わたしがなんとかしますよ…。あつと。」

「スゴく不安だ…。これまで何度も緊急クエストを受けてきたけど、これほど村に対する不安が募つたことはない。依頼はクルペツコなのに全てを含めた難易度は火竜の番を相手しに行くように思えてきた…。無事に帰れるように後でお祈りしておこうかな…。」

「頑張りなさい、ヨハン。無傷で帰つてきたらまた奢つてあげるわよ。」

「ほ、本当か?」

「アナタがいないとの手のクエストを受けてくれる人がいなくなるからね…。また、帰つてきたら即刻クエストを受けてくれるならそれくらいしてあげるわ。」

「ああ、そのつもりで頑張るよ。ありがとうシヤーリー。」

「頑張つてね。アタシはそろそろ受付に戻るわ。それじゃ、お二人
セレモニーハウスへ。」

そう言つて去つていくシャーリー。その途中、彼女をいやらしい目
で見ていたハンターに、彼女の必殺技、おぼん（縦）が炸裂すると
いう集会所名物の出来事が起きた。彼女曰わく「うして一度攻撃し
たハンターに対して次は優しくすること」で、簡単に使い勝手のいい
ハンターを作るそうだ。恐るべし……受付嬢。さてと、飯も済んだし
これからどうしようかな？

（イーシヤ side）

なんだかヨハンさんとシャーリーさん、いい雰囲気だったなあ……。ど
う考へてもおぼんで叩かれてたハンターと扱いが違うし……。

「あの～？」

「ん、どうしたんだいイーシヤ？」

「ヨハンさんつてもしかしてシャーリーさんと付き合つてますか？」

「そうだな……いつも付き合わされてるかな？」

「はい？」

「だいたい、いつもシャーリーの愚痴とか聞かされてるかな。たま
に悩み事とか言つてくるんだけど、そうすると必ず最初より疲れた

表情で帰つていくんだよな…。個人的には頑張つてアドバイスして
るつもりなんだけど…。だから付き合つてるとこうよりシャーリー
に付き合わされてる感じかな?」

「シャーリーさんドンマイです。ヨハンさんは、わたしの想像の遙
か上をいく究極の鈍感の人間のようです。だから、わたしにもさつき
の告白みたいな発言をサラッとしちゃうわけですね…。見た目もか
っこよくて、性格も良さそうなのに…。つて、わたし何考えてるん
だ!まだ会つてからほんの少しあしか経つてないのに…。こんなこと
考えちゃう自分が恥ずかしいよつ…。

「つてわけなんだけど…。大丈夫かイー・シャ?顔赤いぞ。熱でもあ
るのか?」

「いつ、いえ。そんなことないですよ~。ただうつとぼーっとし
てて。」

「せうか?なら良いんだけど。さつきの僕の話を聞いてた?」

「スマセン…。聞いてませんでした。」

「それじゃ、もう一回今後の動きを確認するよ。とりあえず今日の
出発はキツいんで明日の早朝に出発つことだ。」

「わかりました。」

「それで、これから的时间は市場に行つて、村に着いたら直ぐにク
エストに行けるようにあらかじめ準備をしておきたいと思つ。」

「でも…わたしお金が…。」

「だから、これ。」

そう言つて三ハンさんは袋を手渡してくれた。開けなくても触った感触でお金が入つてゐることがわかる。それも、量が多い。

「い、こんなに貯つても返せませんよ。」

「いこや、返せるよ。金額をしつかり確認してみな。」

言われるままに袋の中身を調べてみると、今回のクエストの報酬金のちょうど半分が入つていた…。

「多人数でクエストを受けるときは、報酬金は山分けが普通なんだ。だからイーシャには先に半分の金額を渡しておくから、報酬金は僕が貰つていいことにしておいたんだけど…。」

「で、でも、わたしあの金に見合つた活躍できないですよ…。」

「そんなことないよ。例えクエストであまり活躍出来なかつたとしても、イーシャには村までの道案内やクロイツ渓流の地形とかを教えてもらつから、その分のお代だと考へるとむしろ半分じゃ少ないくらいだよ。」

「それでも…。」

「自信を持ちなよ、イーシャ。君なり絶対その分の活躍ができる。僕はそう信じてこるから。」

「三ハンさん…。」

このクエストをヨハンさんに受けて貰つて本当に良かつたと思つ。スゴく優しくて頼れる感じがする。この人となり自分に自信を持つていける気がする。…ってまた変なこと考えてるよ、わたし…

「わかりました…」このお金ありがとうございます。」

「うん、やつしてくれると助かるよ。それじゃ市場に行こつか。行き着けの店紹介するよ。」

「はい…よろしくお願ひします。」

「おじさん、もうひと息…」

「これでも折れないかい。嬢ちゃん強者だねえ。」

「これは大事な人達の思いの詰まつたお金なんです。簡単には使えませんからね。だから、もうひとこえ…」

「ハツハツハ、おもしれえ嬢ちゃんだな。気に入つたぜ。回復薬十本セット50円、回復薬グレート十本セット100円でござだ！」

「よし、買います…」

「まいどあり…けど参つたな。これじゃ赤字スレスレだぜ…。おい、嬢ちゃん。今後ウチの店ひいきにしてくれよな。」

「おじさんの店が一番安かつたらまた来ますよ。」

「手厳しいなあ。ヨツシャ、いつまでも嬢ちゃんのひこうきの店でいられるように頑張ってやるぜー。」

「はい、よろしくお願ひしますね。」

「おい、ヨハン。おめえもしつかり買つていつてくれるよな?」

「……はい。」

いや～ほんとにいいとこだなあ～ドンドルマ。みんな優しくて、しつかり値引きしてくれて。一つ前の店ではクーラー、ホット、元気ドリンクを五本ずつセットで300円で売つてくれたし、もう2つ前の店ではトラップセットを200円で売つてくれた。ホントにい人ばかりだよ。でも、後ろにいるヨハンさんはなんだか疲れるみたい…。どうしたんだろう?

「大丈夫ですか? ヨハンさん。」

「……ああ、だ、大丈夫…。」

「おう、大変そうだな、ヨハン?」

わたし達の前方から黒い服をきた長身の男性が話し掛けってきた。

「まずは、はじめましてだな。俺はライル。この五番ブロックのトップの管理人だ。」

ヨハンさんはわく、このドンドルマの市場は大き過ぎるため、市場

をいくつかのブロックに分けて管理しているらしい。「ブロック」とのルールを設けたり、売上を総括するのが管理人の仕事ということらしい。このライルさんという人は、つまりこのブロックの責任者のような人なんだそうだ。

「はじめまして、イーシャ・アスペリアです。よろしくお願ひします！」

「おう、よろしく。あんたなかなか有名人になつてきてるぜ。」

「そうなんですか？」

「なんせ、とんでもねえ値切りしてるからな。ギリギリで赤字にならないところで買つていく値切りの天才としてもう有名になつてるぜ。あんたは、このブロック気に入ってくれたかい？」

「はいー皆さん優しくて、商品もしっかりした品物ばかりですし、購買意欲の駆り立て方がスゴく上手いです。客としてとても買い物しやすく感じます。」

「ハツ、あつたりめーよ。お客様第一がこの五番ブロックの売りだかんな。」

「スゴいです！商人の鑑です！」

「へッ、ありがとうよ。いつまでもひいきしてくれよな。」

「はいー是非。」

「そうだな。そしたらお近づきのしるし」「ねやるよ。」

セーフティ ハーライルさんはわたしに大きめの箱をくれた。

「あつがとうござります。中を見てもこいですか?」

「おひよ、あつと喜んで貰えるぜ。」

早速箱のなかを見てみると、セイには様々な色のビンが入っていた。

「これつてもしかして…。」

「あんた、『使いだる。だから』に装着できるビンを七種類二十本ずつプレゼントだ。」

「いいんですか?」んなに貰つて…。」

「言つたら。お客様第一だつて。今後もひこきにしてくれるなんらこんくらいサービスしなきやだろ。まだ余り出回つてない減気ビンもつけてあるから使い勝手とかも報告してもらえると嬉しいんだが…。」

「これだけ、よくして貰つたからこま、必ずや報告させていただきます。本当にありがとうございます!」

「おひ、これからもよろしくなーそれと…おこ、ヨハン。」

「…なーっ。」

「今日はお前も随分買つたみたいだな。珍しいじゃねえか。」

「なんか買わざるを得ない展開になつてこつちやうからね…。」

「お前も、少しは値切り術見習つてみたりいんじゃねえか?」

「それが出来れば苦労しないよ…」

「だらうな。今日はだいぶ繁盛させて貰つたぜ。ほりよ、サービスだ。受け取りな。」

ライルさんから小さな袋を投げ渡されたヨハンちゃん。何を貰つたんだろう?

「よく僕が欲しかつた物が分かつたな、ライル。」

「帰つてきひすぐ」んなとこるひこ」とせ、朝には出るんだろ? いつでも出撃可能な武器と言つたらアレだろ?」

「流石だな…。その通りだよ。今回は彼女もぐるし、相手がペッコだからね。」

「なるほどな。しつかり準備してやつたんだから、大丈夫だよな?」

「ライルの心配してこる」とは絶対起こらないから安心しろつて。」

「必ず、一人とも無事に帰つてこよ…。」

「ああ、まかせとけ!」

残念ながら一人の会話を聞いても渡されたアイテムは分からなかつた。後で聞いてみようかな?

「じゃあな、お一人さん。またよろしくな！」

そう言つてライルさんは去つていつた。いや、五番ブロックの人たちは本当に良かったなあ。村のみんなにも教えてあげよつと。

「セヒト、ルルルの宿にいくかい？」

「もうですね。こつぱに買い物しましたし、ルルルもくへつしたいですね。」

「…もうだね、ホント色々買つちやつたなあ…。」

何だか、遠い田をしてこるマハンさん…。何があつたんだろう？触れないほうが良さそうだね。

「もういえば、ライルさんから何を買つたんですか？」

「これから？まあ…多分使わないけど、ピンチのときの切り札かな？」

「なるほど…。」

マハンさんは本当に想定外のことが起きないよつじしてくれている。あとは、わたしが自分を信じて闘えればいいんだ。

「こりこりありがとうございます。マハンさん。」

「毎回そんなにお礼をいわなくていいよ。今はチームの一員だしね。」

「

「チームの一員？」

「えい。同じクエストに行くチームメイトのことを派遣するのは当たり前のことだからね。」

「ヨハンさん……。」

「さあ、明日は早いから各自の部屋でひととと休もう。」

「はいー。」

しかしこの後、宿屋で一波乱起きることとなる……。

「申し訳ありません。本日はもう一人部屋は埋まってしまったので、一人部屋だけとなりますが……。よろしいでしょうか？」

ええええええつつーー！

イーシャの経歴～ドンドルマに現れた天才～（後書き）

はい…そんなわけでいろいろ勝手な設定を作ったので説明を入れておきます。

1、ハンターになるには

ぶつちやけほとんどの誰でもなれる設定です。ただし、強いハンターを目指す人はドンドルマのハンター養成所に行きます。養成所でやることは、ゲームで言う初心者演習を4人チームで行ったり、モンスターに関する知識を高めたりするところだと、考えてください。そこで訓練を積むのでチーム戦は慣れますが、勿論卒業後はバラバラになるのでソロとして活躍するには2～3ヶ月必要というわけです。

イーシャは1ヶ月（ドンドルマへの移動をのぞけば三週間）でソロでドスシャギイを狩れるほどの実力があるため、一人に驚かれたわけです。

2、ドンドルマ市場について

作者の勝手なイメージで作り上げました。一からハまで番号分けされたブロックがあり、それぞれ対象の客をかえたり、安さで勝負したりしてブロックごとに用」との売り上げで勝負しています。年間でトップになつたブロックには特別報酬が与えられるという設定です。ライルの管理する五番ブロックはハンター用品に特化したブロックです。機会があれば他のブロックも説明していきます。

最後に更新のペースですができれば週一くらいでやつて行きたいと

思こまか。

本田は読んでくだけつてあつがといへりれこまか。歸れど、此こお出
を

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4375z/>

モンスターハンター【負に抗う狩人】

2011年12月31日16時46分発行